**南吉、賢治、啄木、多喜二を語る**

　　　　　 　　　　　小林　しんじ

○時　　　　　　ある日、ある時

○場所　　　　　大学のゼミの一室

○主たる人物　　省略

〈プロローグ〉

古びた大学の一室。学生が次々に入ってくる。四角囲みに十人が座る。林　太郎のゼミでは、卒論に向けて、作者と作品の研究が進められている。林の説教じみたおしゃべりがはじまる。

林　　　研究が表面的にならないように。そのための一歩が作者と作品研究だ。できるだけ現地に行き、下調べしておく。対話的なゼミにしていくように。

田所　　ゼミ長として一言。近代の有名な作家ということで、新美南吉、宮澤賢治、石川啄木、小林多喜二を取り上げています。

林　　　今日は、それぞれの研究をしている面々を招待した。新美南吉、宮澤賢治、石川啄木、小林多喜二と名のる人たちだ。(自慢げに)

どっと風が吹きドアが開いた。マントを着た賢治が入ってくる。四人登場。顔立ち、身丈、風貌が、壁に掛けてある写真の南吉、賢治、啄木、多喜二に似ている。学生たち驚いている。

田所　　写真で見たご本人にそっくりでびっくりポンです。一言どうぞ。

南吉　　僕は、以前南吉記念館のガイドをしていた、「南吉」です。（帽子をかぶったまま）

賢治　　私は賢治の研究者です。みんなが私を「賢治」と呼んでいます。（マントを脱いで、どっかと座る）

啄木　　私は石川啄木の親類の子孫です。偽物が多いなかで、正真正銘の「啄木」です。（ニヤリと笑いながら）

多喜二　僕は、虐殺されたので、今だに浮かばれない。林ゼミでは、珍しく僕の研究をしているということで現れました（嬉しそうに）

田所　　始めよう。今、ここにいるのは一四人。今日は、新美南吉「ごんぎつね」、宮澤賢治「永訣の朝」「雨ニモマケズ」、石川啄木「一握の砂」、小林多喜二「蟹工船」です。

〈１　新美南吉を語る〉

南吉、なんとなく晴子を見ている。

田所　　新美南吉から始めよう。作者と作品研究をしている矢木晴子さんお願いします。

耳をそばだてて南吉が聞き始める。

晴子　 「新美南吉記念館」へ行きました。南吉は（１９１３～１９４３）です。(のびのびと)南吉は、「悲哀は愛に変わる」という言葉を中学校時代に残しています。「ごんぎつね」は、その言葉を受けて作られています。「雨ニモマケズ」を書いた宮澤賢治を尊敬していたことも分かりました。今後二人の共通点を探してみたいと思います。

南吉　　四年生の教科書に載っています。全国民が知っていますよ。有名なのはもちろん僕です。(胸をはって)

賢治　　もちろん。それ以上有名なのは宮沢賢治、私です。

南吉と賢治がにらみ合い、つかみ合いになりそう。学生たち驚いたように見つめている。

啄木　　自慢話は、それくらいにして、落ち着いてください。

多喜二　お互いに自慢しあっても意味がない。作品で勝負です。(諭すように)

華子　　南吉の生涯をＤＶＤで見ました。苦労して作品を創り上げてきた姿が描き出されています。作家としてもすばらしい人です。

晴子　　南吉は、日記も残しています。失恋、病気と苦しんだこともあり、孤独でした。巽聖歌に出会い、文学に親しみ、病気をしてからもあきらめず童話を何冊も書きました。

啄木　　僕のローマ字の日記には、秘密も書かれていますよ。

多喜二　どうせ、ありふれた私生活でも書いてあるんだろう。(啄木、多喜二を睨み返す)

南吉　　私の才能に注目してほしい。ぼくは小学校の頃から成績も良好で、作文も先生に褒められていました。どんな才能があるかと、たくさんの童話を書き始めました。

南吉の故郷には、彼岸花が咲く。「尋ねてみたい」と学生たちが口々に言い出した。

南吉　　嬉しいです。僕の生い立ちを辿り、 僕の生き方を作品とともに受け入れようとする姿勢に励まされます。ここに来たかいがあります。

南吉、涙をポロリと流し、袖でぬぐっている。

田所　　新美南吉記念館を尋ねたいということですね。ゼミのみんなで行きましょう。南吉さんもう泣かないでください。(なぐさめるように)

林　　　いつも言ってるが、現地に行けば何かつかめます。作者のふるさとを尋ねたら。(威厳をこめて)

南吉　　僕の「ごんぎつね」については、どうだろうか。

この時、ドアが開いて、一匹の柴犬らしきものが飛び込んできた。よく見ると子狐。学生たち、狐の臭いで鼻を押さえている。子狐は、ぴよんと跳ねて外に出ていった。あっけにとられて沈黙。

晴子　 「ごんぎつね」が兵十によって、撃ち殺されるという悲劇。『権狐』の草稿では、「権狐は、ぐったりなったまま、うれしくなりました」となっています。死ぬ間際になって「うれしくなりました」としたのは、異質な者同士でもわかり合える、相通じ合えるというメッセージです。

健一 「ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました」にしても、「白い煙が細口から出ていました。」と絡まって文章に余韻が残り、ごんの気持ちに対する読者の想像が広がっていく。

南吉　 やはり、ストーリィには、悲哀がなくてはならない。悲哀は愛に変わる。悲哀、すなわち愛を含めるストーリィを書こうと思っていた。僕の「ごんぎつね」は、きつねが撃ち殺されて死んでしまったというような単純な物語ではないのです。初恋の「元木みなこ」への愛慕も秘められています。

学生たち、そうなんだという顔つきで南吉を見ている。「恋人がいたんだ」と頷きあっている。

学生Ａ　「ごんぎつね」の５の場面に注目しました。兵十は、くりや松たけがおいてあるのは、神様のおかげと思い、ごんは、つまらないなと思う。ここには、兵十にわかってもらえるまで罪の償いをしなければならないという気持ちが表れている。「神様にお礼をいうんじゃ　引きあわない」と愛着の気持ちに変わってきている。

学生たち、なるほどと頷いている。

林　　　ごんと兵十のすれ違いに着目するのは当然ですが、ごんの気持ちと兵十の気持ちにこだわりすぎていて、南吉の独特のユーモアなどの作品の良さがしぼんでいる。

田所　　皆さんはどうですか。

晴子　　私だったら、５の場面の授業では、大きくは、主発問を二つします。一つは「兵十が『えっ？』とびっくりしたのはどうして？兵十の心情を読む。もう一つは「どうして『こいつはつまらないな』『おれは引き合わないな』と思っているんでしょう？」とごんの心情です。

林　　　いずれにしても、文学の読みの心情、心理よみで、どの言葉、どの文章から、そう読めるのかということをあいまいにしています。(強調して)

賢治　　僕も一言、言いたい。南吉の作品は、叙情性や心理描写が、ある種の魅力となっている。授業では、主人公の心情を探ることが中心になっていく。心情を追いかけると、読者は、作品を突き放すことができない。外の眼でもって、作品について作者の意図を客観的に批評できるようにならない。(促すように)

多喜二　南吉には、児童向けということで、情緒に流されてるきらいがある。若すぎたのかな。宮沢賢治の作品とは、このあたりが違う。幼い頃、母親を失った南吉の悲哀が「手袋を買いに」にも出ている。南吉は、一九三三年三月、僕が殺されたのを知って、迷いもあったはずなのに。戦争賛美の詩もあり、どうだろう。

南吉　　僕なりに抵抗した。病気になってからも。

賢治　　南吉は僕と同じところもある。農村などを舞台にしていて、どこにでもおこりそうな身近な出来事が描かれている。豊かな叙情性は読者の感情に訴えかける要素が強い。少年の心理描写や狐などの心理描写に力を入れていますね。(褒め称えるように)

林　　　文科省には、心情を読む文学は必要ない。むしろ実用的文章が必要だという意見もあるそうだ。

作家を名乗る方の切り込みで、だんだんとゼミも熱気を帯びてきた。（続く）